(5) 10年経験者研修を契機とする大学教員と研修教員の研究コミュニティの形成
—研修後の継続的な協働にもとづく共同論文・報告—

大学での研修成果は各学校でどう生かされたか

瑞穂市立南小学校　鷲見敬子*
山県市立高富小学校　土田真紀子*
岐阜市立金華小学校　大野有紀*
岐阜市立長良東小学校　新井恒雄*
社会科教育専修　北俊夫
早川万年

1　大学教員の課題意識

大学での研修も本年度で4年目を迎えた。これまでの研修を通して，次のような事項が課題となっていた。

・大学での研修の機会や内容が，各自の研修計画にどのように位置づいているのか。
・大学での研修は各自の研修にどう生かされたのか。もし生かされなかった場合には，どこに問題があったのか。

これらのことは，研修教員一人一人が，大学での研修機会をどのように受けとめたかという課題でもある。本年度は，こうした問題意識を研修の1日目に大学教員が説明し，下記のような課題を提示した。

「“大学での研修内容が各自の研修主題の解決や，日々の授業実践にどう生かされたか”について，A4判2枚程度にまとめ，11月末ごろまでに大学の担当教員宛て提出する。なお，内容は，大学が発行する『教師教育研究第3号』に，担当教員と連名で掲載する。」

次ページ以降に寄せられた原稿をそのまま掲載する。見出しについては，内容の趣旨がより伝わるよう，一部修正を加えたものがある。

担当者としては，大学での研修内容が，本年度の研修課題の解決に生かされるだけでなく，教員生活12年目を迎えたことを踏まえ，また校内での立場や役割などを考慮して，たとえば次のように生かされることを願っている。

・特に小学校における歴史的な内容の指導に当たって，大学での研修内容を教材研究の進め方や指導計画の作成に生かし，社会科の授業力向上を図ること。このことは，大学での研修を踏まえて新たに作成した学習指導案をもとに，校内で授業を公開し，成果を広げることである。

＊　平成18年度12年目研修教員

・校内や地域で社会科のリーダーとして，社会科を苦手としている教師や，若い教師の相談に乗ったり助言したりすること。このことは，学校として子どもの社会科の学力向上を図るために寄与するようになることを期待しているものである。
・さらには，学校という組織の一員としての自覚を強くもって，より広い視野から学年経営を推進し，学校運営の一端を担っているとの意識をもつようになること。このことは，教員のライフステージに，大学での研修を含め12年目の研修が位置づいていることを意味している。

本来であれば，年度末に再び集合し，大学での研修がどのように生かされたのか。改めるべきことはないかなどについて議論する場があるとよいのかもしれない。このことについては，次年度以降の課題にしたい。（北　俊夫）

2　研修教員から寄せられたレポート

(1) 小学校での歴史学習の意義を再確認し，歴史的事象の取り上げ方を学ぶ

1　はじめに

研修課題である「調べ考え，練り合い，社会的事象の意味をとらえる社会科学習」を目指すために，大学研修「小学校の歴史学習」を受講した。

この研修において，小学校の歴史学習では，大きなねらいとして歴史学習の導入部として，歴史に興味・関心をもたせることが重要であることを再認識した。また，そのための方途として，人物や文化遺産を通して歴史学習を進めること，取り上げる歴史的事象を精選し，重点的に扱うことの大切さを学ぶことができた。

そこで，自分の今までの歴史学習の指導を，特に「世界に歩み出した日本」の単元において，人物や文化遺産の取り上げ方と取り上げる歴史的事象の精選と重点化の２点について見直しを進め，実践することにした。

2　単元内容のとらえ　～「世界に歩み出した日本」～

本単元は，学習指導要領第6学年の内容（1）のキ

大日本帝国憲法の発布，日清・日露の戦争，条約改正，科学の発展などについて調べ，我が国の国力が充実し国際的地位が向上したことが分かること。

に基づいて設定している。

この単元の学習内容に対する自分のとらえは以下のようなものである。明治維新以来，不平等条約の改正は，日本が世界の列強と対等な関係を結ぶために政府の悲願であった。明治時代は，今までの時代と大きく変わって，世界の中の日本というものを意識していく時代になり，日本の国際的な地位の向上のために，日本の伝統を踏まえながら欧米の制度や文化を取り入れ，日本の制度や仕組みを近代化させ，産業や科学の発展に努めた。その結果，日本の国際的地位が向上し，不平等条約の改正につながったのである。

この自分の単元のとらえをもとに，学習指導要領解説を踏まえながら，取り上げる人物や文化遺産，歴史的事象を精選してみると，教科書に書かれている内容もかなり削減することができ，学習内容を重点化することができることが明らかになった。

3　単元において扱う人物や文化遺産，歴史的事象について

以上のことを踏まえ，日本の国力が充実し国際的地位が向上したことが分かるためには，

・法の下で国家が整えられていくこと
・産業や技術が発展したこと
・軍事力が強化されたこと

などを学習し理解することができればいいと考えた。そこで重点的に扱うことにした人物や文化遺産，歴史的事象は次のようなものである。

■　人物
・伊藤博文
・野口英世

■　歴史的事象
・ノルマントン号事件が起こったこと
・大日本帝国憲法を発布したこと
・日清・日露戦争で日本が勝利したこと
・科学者が世界的な発見や研究を行ったこと
・生糸の輸出量が世界一になったこと

4　単元指導計画について

扱う内容を以下のように単元指導計画に組み込んだ。

「世界に歩み出した日本」全８時間

第１時　ノルマントン号事件

ノルマントン号事件の経過から，日本は不平等条約を結んでおり，その改正が必要であったことをつかむ。

第２時　条約改正までの道のり

年表から,不平等条約が改正されていったことを知り,条約改正にはどんな努力や事柄があったかを調べる見通しをもつ。

第３時　大日本帝国憲法の発布

伊藤博文はどのようにして大日本帝国憲法をつくっていったかを年表から調べる。

第４時　大日本帝国憲法の評価

伊藤博文がつくった大日本帝国憲法はどんな憲法で，国際的にどのように評価されたのかを考える。

第５時　日清・日露戦争で中国やロシアと戦う

朝鮮をめぐる３国の考えを資料から考え，２つの戦争の被害を比較することで，日露戦争では大きな損害を受けたにもかかわらず，戦争に勝利したことが分かる。

第６時　科学者が国際社会で活躍する

野口英世がどんな業績を残したのか，年譜から調べたり，他の科学者の業績を年表から調べたりする。

第７時　生糸の輸出量が世界一になる

生糸の輸出量が世界一になった理由を，女工が働く様子を調べることから考える。

第８時　生活や社会の変化

産業の発展が人々の生活や社会，自然環境などに与えた影響について調べ，様々な民主主義

を求める運動が起こったことが分かる。

5　成果と課題

(1) 成果

・学習内容を精選し，絞り込んだため，各時間の終わりに条約改正に近づいていったかどうかを単元の学習課題「不平等条約を改正するために，日本はどんなことをしていったのだろうか」に関わらせて確認することができ，児童の意識がいつも学習課題につながっていた。

・１つの歴史的事象を１～２時間扱うことで，調べる，考える学習活動をじっくり行うことができ，児童の学習に対する意欲も高まった。

(2) 課題

・教科書に掲載されている朝鮮の植民地化を第５時に組み込んだりするなど軽重をかなりつけて扱った。個人的には，今回の学習内容は学習指導要領を満たしていると考えるが，岐阜県の学力テストなどとの関わりで不安な面もある。

・学習内容の精選とともに，資料の吟味も行っていきたい。ねらいにせまるためには，どんな資料が必要なのか，１つの資料を大切に扱う学習姿勢を児童と共に作っていきたい。

（鷲見　敬子）

(2) 多様な視点から教材研究の重要性と教師が話し合うことの大切さを学ぶ

1　コース選択の理由

教職12年目にして，今年度初めて６年生の担任をさせていただいています。そのため，社会科を専門にしていながら，歴史学習の指導にあたるのが初めてのことで，歴史に関する知識の浅さや，自分の歴史観などに非常に不安を抱き，歴史学習を指導する上で何か大切なものを見つけたいと思い，このコースを選択させていただきました。特に，自校の研究との関わりにおいて公開する授業の中で取り上げる内容について，本コースの研修で，歴史的事実の自分のとらえ方を見直してみたいと考えました。

2　研修の成果

(1) 歴史的事実のとらえ方について

これまで，歴史の１時間の授業を進めるにあたって，まず，一番身近にある教科書，そして資料集を中心にじっくり読むことから始めてきました。教科書の中には，教えるべき内容や考えさせるべき内容がしっかりと書かれており，文章の一語一句や資料のひとつひとつを丁寧に読み砕いていくことで，それらを理解できるようになっていると思います。しかし，じっくり読んだつもりでも，ほんの短い一文や資料の中の一部分に深い意味が込められていることが多く，その深い意味までつかみ取れるような読みがなかなかできていないのが現実でした。

今回の研修の中で，担当の大学教授や同じコースを選択された先生方に見ていただいた指導案は，日露戦争において，小村寿太郎が賠償金のないポーツマス条約を結んだ理由を考えさせるという授業でした。その指導案について，いろいろな意見をいただく中で，「日本という一つの国だけでなく，外国との関係の中で，日本がどのような状況下にあったのか」をとらえておくことの重要性を知ることができました。子ども向けに書かれた教科書や資料集の中では，そういった世界の中における日本の状況について深く述べられてはいません。日英同盟を結んだことやポー

ツマス条約の締結にアメリカ合衆国の仲介があったことなど，大切な内容が記述されていることはもちろんですが，それらが当時の日本にとってどのような意味をもつことであるかは，詳しく述べられていないように感じます。しかし，イギリスやアメリカの後押しに期待するしか生き残る道がなかった当時の日本の実態を考えたからこそ，十分満足のいく条件ではないポーツマス条約でも結ぶしかなかったということを，教える側である私が知っていることは必要だと教えていただくことができました。外国との関わりの中で日本が大きく変化してきた時代，特に幕末の開国以降の歴史学習では，日本の歴史を広い目で見ていくことが大切だと知ることができました。教科書や資料集を読むことから始めても，そのひとつひとつの文章や資料に込められた意味を，広い目で見て考えていく，そういった教材研究をしていきたいと感じることができました。

(2) 研修テーマを話し合う中で

12年目研修に限らず，これまでいろいろな研修を受けたり，自校において研究を行ったりしてきました。その中で，必ず「研修テーマ」や「研究テーマ」が設定され，自分でもテーマをつくる機会が何度もありました。今回の12年目研修の私の研修テーマは，「仲間と練り合い，社会的なものの見方・考え方を深める子の育成」というものです。大学研修では，この個人テーマをお互いに紹介し合う時間がありましたが，指導教員に助言をいただく中で，テーマに使った言葉の意味を，自分自身が把握しきれていないということに気がつきました。

「練り合う」とはどんな状態のことを指すのか。「社会的」とは,「理科的」とどのように違うのか。どうなれば「見方・考え方が深まった」といえるのか。質問されると，どれも返答に困ってしまいました。また,他の先生方の研修テーマでも,「自ら調べ考え」「主体的に学ぶ」「多面的に考える」など，様々な言葉が用いられていましたが，それらひとつひとつが具体的にどのようなことを表すのか，非常に難しいものでした。

話し合う中で，自分が使う言葉については，自分で納得しきれるだけの意味をもって使いたいと感じることができました。思い返してみると,これまで自分が使ってきた研修テーマや研究テーマの文言も，自分自身，曖昧にしか意味をつかめていないものがほとんどでした。今後，このような言葉のひとつひとつにもっとこだわって，自分が目指す子どもや授業がどんなものであるかを，はっきり見つけられるようにしたいと思います。

(3) 同世代の先生方と学ぶ機会をいただいて

普段，自校で勤務している中では，同世代の先生方の実践を知る機会というのは，それほど多くはありません。今回，大学研修を受けさせていただいて，同世代の先生方の素晴らしい実践に触れ，大きな刺激を受けることができました。中には，高校や大学時代の友人であった先生もみえ，私よりも一歩も二歩も先を行く実践を積んでみえることを知って，私ももっと勉強しなければならないという気持ちをもつことができました。

また，卒業してから足が遠のいていた大学での研修ということで，久しぶりに専門家の先生に助言をいただくことができ，学校現場とはまた違った，歴史学習の在り方を学ぶことができたように思います。

（土田　真紀子）

(3) 学ぶ意欲を育て，基礎・基本を身につけさせる社会科の授業づくりを

1　研修課題

「主体的に学ぶ力を育成する教科指導のあり方」

2　課題設定の理由

社会科において「主体的に学ぶ力」を身につけた姿を次のように考える。

① 地域社会や歴史上の事象に触れたとき，なぜだろう，どうしてだろうと疑問をもち，自ら課題をもつことができる。

② 課題解決に向かって，進んで見学・調査などを行い，調べてわかったことや考えたことを的確に表現できる。

③ 自主発言などによる練り上げ活動を通して，自分の考えを仲間とともに深め，新しいものの見方や考え方に気づくことができる。

④ 次の課題解決に生きる学び方を身につけていくことができる。

このような「主体的に学ぶ力」を身につけることにより，子どもたちは興味･関心をもち，楽しみながら学習に取り組むことができると考える。そこで，研修課題を「主体的に学ぶ力を育成する教科指導のあり方」と設定し，「主体的に学ぶ力」を身につけるための指導のあり方を模索していこうと考えた。

3　大学研修の成果

(1) 身につけさせたい基礎・基本を明確化した授業づくり

大学研修は，研修課題の具現化に向けて見通しをもつことから始まった。その中で話題になったことは,「何を学ばせるか」を考えることが大切だということだった。「主体的に学ぶ」ことができるためには，教師の指導が必要である。「何を学ばせるか」を明確にしなければ，的確な指導はできない。

そこで，まず『社会科の基礎・基本』（北俊夫著）から，「社会科の基礎・基本とは何か」，そしてその「基礎・基本を確実に身につけるために」はどうしたらよいのかを学ぶことから始めようと考えた。

そこには，「基礎・基本を確実に身につけるために」，「単元設定の根拠と意図を明確にすること」と，「目標と指導と評価を一体化」させることの大切さが述べられていた。そこで，実際に学習指導案を作成することを通して理解しようと試みた。

まず，『学習指導要領解説』 社会をもとに，「獲得させたい知識は何か」「社会に対するどのような見方・考え方を育てたいのか」「どのような技能・能力を身につけたいのか」「養いたい態度はどのようなものか」という単元で身につける基礎・基本を明確にした。次に，この指導目標を実現させる教材を選定し，現地調査や聞き取り活動などを通し，授業で扱う資料を決定した。そして学習活動と学習過程を考えた。ここまでに，とても多くの時間を費やした。しかし，この活動を通して，「何を学ばせたいか」が見えてきて，常に目標と照らし合わせながらズレがないかを見直す習慣がついた。

こうして学習指導案は完成した。しかし大切なのは，授業の中で学ばせたい基礎・基本を身につけるために的確な指導を行うことである。そのために全体・個に応じた学び方を指導したり，授業後には評価し，よりよい授業づくりを目指したりしていく必要がある。この積

み重ねが，「主体的に学ぶ力」を育成することにつながると考える。

(2) 学ぶ意欲を高める授業づくり

大学研修最終日に，作成した学習指導案を交流した。その中でインパクトのある資料を単元の導入で扱うことにより，児童の「考えたい」という興味・関心が生まれ，追究の意欲が高まることを教えていただいた。

扱う資料を検討するだけでなく，発問の構成の仕方を工夫することも，児童の「考えよう」という意欲を高めることができる。

「なぜ」「どうして」という問題や疑問をもつ体制を醸成することで，「主体的に学ぶ」意欲を高めていきたい。

4　今後の大学研修に向けて

大学研修は，これまでの「社会科の授業づくり」に対する考えをより確かなするものとして有効であった。また，専門的な立場から「新しい歴史研究の動向」や歴史的事象に対するとらえ方を教えていただいたことにより，自分自身がより歴史学習に興味をもち，認識力を高めていきたいと思った。

研修課題の具現化に向けてこの二本柱で指導していただけたことは，教員としての資質能力を高めることにつながったと思う。大学研修期間中だけでなく，継続して「社会科の授業づくり」等について相談・指導していただけるとさらにうれしいです。

（大野　有紀）

(4) 普段は学べない情報を知り，日ごろの実践を見直す機会になる

1　研修の流れについて

大学を中心にした研修は，5回行われた。各回の主な取り組みについては，以下の通りである。

①7月26日　自己研修課題についてのご指導
　自己研修課題について，研修内容と研修の方法を報告した。また，研修について，具体的な研修方法や方向性について，ご指導をいただいた。
②8月10日　自己研修Ⅰ
　小学校の歴史学習について，どの単元で実践するのか，指導要領や過去の実践事例等を活用して検討した。2学期以降の実践ということもあり，『明治時代』を中心に指導計画を立てていくことにし，関係図書を読んだ。
③8月11日　自己研修Ⅱ
　指導要領解説や教科書，過去の実践事例をもとに，『世界に歩み出した日本』についての単元指導計画を作成。この単元を通してつけたい子どもの力を考えながら，単元の構成を図った。
④8月21日　自己研修Ⅲ
　本時の指導案を作成。実践する小単元を『陸奥宗光と条約改正』とし，思考・判断の力をつける時間とした。子どもたちが調べたり考えたりしたことをどのように練り合わせていくかを重点に指導案を作成しながら，その手立てを考察した。
⑤9月7日　他の研修教諭との交流及び，指導教員からのご指導・ご助言
　作成した指導案を持ち寄り，交流するとともに，指導案についてご指導，ご助言をいただいた。歴史学習について4，6年を中心に提案があった。

全5回の研修のうち，1回目と5回目は，大学での研修であった。この大学での研修では，普段，なかなか学べない『小学校の歴史学習』について，専門的なこと（「小学校における歴史教科書

の特徴」「小学校の歴史教育における単元構成の在り方」「歴史史料のとらえ方」など）について，指導教員の北先生や早川先生からご指導をいただき，大変意義深いものとなった。また，2回目から4回目までの自己研修は，夏休み中ということもあって，1ヶ月ほどのゆとりがあり，自分なりにじっくり考えて指導案を作成することができた。

全5回の研修であったが，自分にとって大変有意義な時間となった。2学期以降も，自分から積極的に相談に乗っていただくことができれば，さらに効果が上がったと思われる。そこが，課題である。

2　自分の研修課題とのかかわりについて

自分の研修課題は，「社会的事象を多面的に考察し，公正に判断する子が育つ社会科学習」である。この課題に沿って，指導教員の北先生や早川先生から，次のようなご指導をいただいた。

①「社会的事象を多面的に考察する」とは…
社会的事象を考察するには，「調べて，考える」ことが欠かせない。
○調べる…資料を通して，事実を調べること。
○考える…事実の背景にあるもの（目に見えないもの）を考えること。
これらを様々な面から調べたり考えたりすることが，多面的な考察につながる。
②“何を学ばせるか”
多面的に考察し，公正に判断する子を育てるためにも，“何を学ばせるか”が大切である。何を学ばせるかを明確にすると，追究の視点や手だて，活用する資料が明確になる。
③必修と選択
本時において“大切なこと”は，みんな（共通）で学ぶことが大切。何もかも選択にしてしまうと，大切な部分を学ばない（理解できない）子が生まれてしまう。そうならないためにも，何をみんな（共通）で学び，何を選択させるのか，その見極めが大切である。
④発達段階に応じた学習内容（小学校らしさを）
歴史学習は，中学校でも扱う。小学校の歴史学習の難易度（学習内容）を考慮しないと，考察すらできない子が生まれる。小学校らしさを大切にすること。

本講座のテーマは，「小学校の歴史学習」であるが，自分の研修課題や小学校社会科として大切にしたいことなどについても，具体的にご指導いただけたことは，大変意義深いものであった。

12年目研修には，「共通研修」や「選択研修」が位置付けられている。その中で，自分の専門である「社会科」について学ぶ機会は，県・市共催研修の「教科指導の計画」，「大学研修」，「課業期間等の研修」など，多くある。その中でも，この大学研修は，他の研修と違い，大学の先生から専門的なことを，直接ご指導いただける大変貴重な機会であった。事実，上記以外にも「小学校の歴史学習のポイント」や「歴史教育における知識と思考」など，専門的なことを多く学ぶことができた。さらに，自分の研修課題に対するとらえ方の甘さもご指摘いただき，自分の実践等を見つめ直すよい機会となった。

今後は，北先生や早川先生からいただいたご指導・ご助言をもとに，自分の研修課題や自分の実践を改めて見つめ直し，実践を積み重ねていきたい。

3　今後について

今回の大学研修を通して学んだ『小学校の歴史学習』について，自分の実践に生かしていきたい。また，歴史学習の意義や歴史学習が第6学年だけではなく，他学年でも実践可能であることを学んだので，今後，新たな単元，教材の開発を行う上で，参考にしたい。

○指導案の作成…子どもたちに“何を学ばせるのか”そのために“どのような資料・活動が必要

か」などについて，発達段階に合わせて考察し，単元計画や指導案の作成を行う。

○歴史学習…第6学年以外の学年においても，どの学年でどのような実践が可能かを検討し，新たな単元，教材の開発に取り組む。

（新井　恒雄）

3　歴史学習をめぐる大学研修の課題

小学校の歴史学習は，6年生になってから系統的に展開されることになる。それまでの社会科とは異なり，時間軸を前提とした視野の拡大が子供たちに求められることになり，児童だけでなく教師にとっても新たな取り組みが必要とされる。そこで，一方的な知識の伝達ばかりを課すことになると，よく指摘されているように，暗記ものとしての弊害が生じてしまう。また，社会科としての特質を踏まえ，社会的事象にとり組む力を育てることを念頭に置いてはいても，何度か6年生社会科を担当しているうちに，取り上げる教材と単元構成，授業課題の提示等が経験的に組み上がってしまい，パターン化された「授業」が繰り返されてしまいがちであることも一つの問題点であろう。

本大学研修は，ある程度，授業実践を重ね，そこに自らの手法を経験的に作り上げてきた教員が，改めて広い視野から指導計画の作成，教材の見直し等を進め，さらなる授業力の向上に努めることを目的としていた。研修に参加した教員が自らの取り組みを報告し，互いに意見を述べ合うとともに,大学教員もそれぞれの立場から具体的な授業のあり方について考えるところを述べ，その交流の上で各自があらたな指導計画を作成することとした。

研修参加教員が共通して感じ取っていたことは，まず第一に，自らの授業実践を落ち着いてとらえ直し，その特徴，問題点を改めて検討することの重要性であろう。ややもすれば日常の慌ただしさに追われてしまいがちになるなかで,そもそも社会科とは何か,基礎･基本の学習とは何か，どのような姿勢で授業内容の精選，重点化に取り組んでいくのかといった事柄を考えてみる契機となったのである。そして，学ぶことへの意欲を高めながら，たしかな学力の育成に努めるため，これまでの指導計画の再検討も含めて，今後，積極的に取り組むべき課題をそれぞれが具体的に認識することになった。大学教員の側も，現に取り組まれている教科指導の実情に触れ，教科の本質を改めて考えるとともに，教員養成課程における指導法，教科内容の授業との結びつきも検討し直す機会となった。

歴史学習は，小学校だけでなく中学校，高等学校でも重ねられることになる。もちろん教科の内容は，それぞれの段階で相違があり，一見，繰り返しと思われる日本史においても小学校ではまず子供たちの興味・関心を大切にすることが求められる。そのために人物への注目が指導計画においても重視されることになるが，本研修を通じて各教員が作成した指導案でも何人かの人物が扱われることになった。人物を前面に出すことによって子供たちの興味を引き出し，人物の生きた時代を感じさせ，そこから社会に対する見方考え方を育てていくのである。その際に重要なことは，授業で扱っている歴史を教員自身がどのような視点でとらえているかであろう。「歴史」は，教える側がどのような視点で語ろうとするか，いかなる資料を教材とするかによって，受け取る側の印象は大きく異なる。その点で教師の取り組む姿勢が大きく問われる教科である。もちろん，多様，多角的な視点が必要とされ，教師はできるだけバランスのとれた歴史像の提示に努

めなくてはならないが，その点で重要なのはやはり教材研究であろう。それも個々の教材の検討とともに，単元構成に関わるような歴史像の基本的な描き方が問題となる。

今回提出されたレポートおよび大学研修の際に報告された指導案では，明治を扱う場合がしばしば見られた。学習指導要領に例示されている42人の人物がもっとも集中する時代であって，現在の日本を考えるにあたってもきわめて重要なところとなる。それだけに授業時間数も多くなるが，小学校においては，まず日本にとっての「近代」の重要性が，さまざまな人物の活動を通じて，子供たちに生き生きと伝わる工夫がなされなくてはならない。世界との関わりを真剣に考えた人々の姿と，大きな視点から見た時代の変化が歴史認識の基点となる。子供が興味をもって歴史に接するには，そもそも教師の側がこの躍動する時代に興味を持っていなくてはならない。その意味で，教材として取り上げる事柄に結びつく人物自体に教師がどれほどの興味をもっているかがまず問われることになろう。教材への探求が進むほどに教師自身の興味も深まっていく。このたびの大学研修においても,扱う歴史への理解が進展することによって,教師自身も歴史の「面白さ」を感じ取っていったようである。

歴史学習の場合，まず教師自身が歴史のリアリティーを感じ取ることが不可欠である。そうでなければ生きた人間像は伝わらない。歴史のリアリティーを感じ取るためには，さまざまな方法で教師が歴史にアプローチすることが大切である。読書だけではなく，史跡，文化財等に実際に触れることも重要な教材研究である。リアリティーを感じ取りながら歴史へのイメージをふくらませ，時代の姿を柔軟な視点で描いていく，このような歴史学習へのとり組みが期待されるところである。授業力の向上にはさまざまなアプローチが考えられるが，教員が従来の教材認識に安住せず，熱意を持って教材研究，開発にあたり，新たな工夫を重ねていくことが学習の場のさらなる活性化に結びつくと思われる。

（早川　万年）